

サッカー日本代表 帯同ドクター

女性スポーツドクターのパイオニアとしての軌跡

著：土肥美智子
構成：いとうやまね



発行：時事通信出版局
定価(本体1,600円+税)
四六判，200ページ
ISBN978-4-7887-1651-3

書籍紹介

11月初旬，ラグビーワールドカップは大成功のうちに閉幕し，サッカーワールドカップ2022に向けたサムライブルーのアジア予選がすでに始まっている。このたび，サムライブルーの帯同ドクターである土肥美智子先生により「サッカー日本代表帯同ドクター」が上梓された。土肥先生は，放射線診断医からスポーツドクターへの道に転身した女性医師である。

サッカーのようなコンタクトスポーツで起こりやすい脳振盪に対する対応は，選手を守るうえでとても重要である。長友選手が一過性に見当識障害をきたしたときには，そのときの映像を解析していただいたスポーツドクターとしての判断が記載されている。また，競技会場でのドーピング検査の検査対象者の抽選方法や，競技外の練習場や宿泊施設での抜き打ちドーピング検査のことなど，現場でなければ知らない内容も多く興味深い。

彼女の自分史の章では，放射線科で画像診断を学び，国立スポーツ科学センターで臨床経験を積み，現在はスポーツドクターとして競技現場でプライマリケアに近い立ち位置を築き上げた経緯が述べられている。日本代表のスタッフ総勢50人のなかでも，ロシアワールドカップ32カ国のチームドクターのなかでも，女性は土肥先生ただ一人だったという。まさに女性医師としてこの領域のパイオニアである。

最もうれしいのは，けがや病気をしていた選手が，別メニューではなくほかの選手と同じ練習に合流した瞬間だという。間に合ってよかったねと声を出したい衝動に駆られるという。長友選手が本書の帯で「土肥先生は代表チームのお母さん!」と書いているのも納得できる。

『臨床画像』Vol.35 10月増刊号は，土肥美智子先生編集による「スポーツ医学の画像診断：競技復帰を目指して」である。副題の“競技復帰を目指して”は，スポーツドクターとしての土肥先生の思いが込められている。併せて読んでいただければ，より現場に役立つ画像診断報告書が書けるものと考えている。

東京慈恵会医科大学放射線科 客員診療医長 福田国彦

MEMO

MEMO